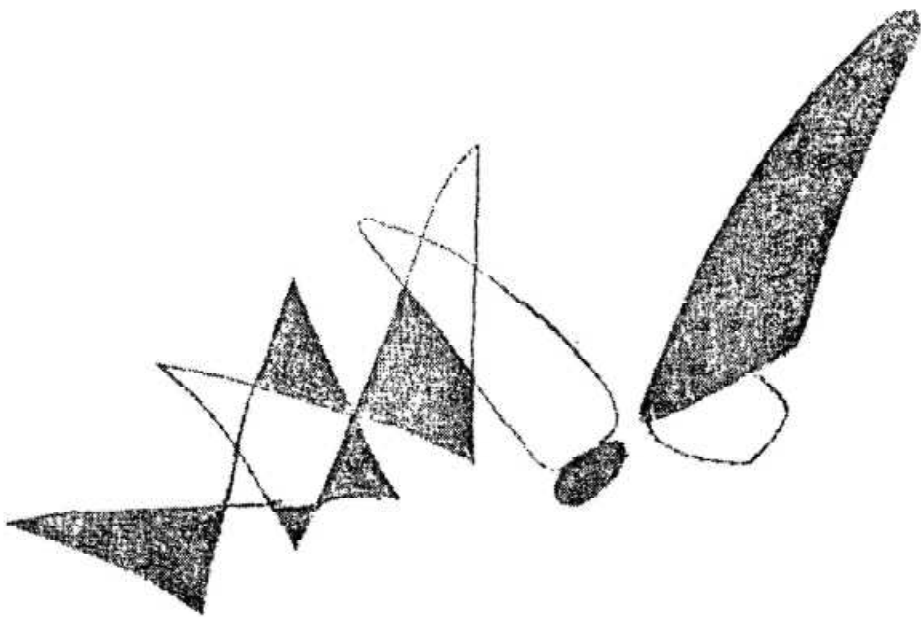


すすむし

Vol. 9 No. 4



R.J

倉敷昆虫同好会

1959. Dec.

目 次

表紙デザイン	友野良一	
西太寺近隣の蝶 第五報	赤枝一弘	1
ニシキキンカメムシの生態断片		
(成虫の活動が見られる植物について)	小野洋	7
<hr/>		
おとしぶみ (短報)		
<hr/>		
蝶の記録二、三について	堀浩	8
羅生門のクロホシテントウゴミムシダマシ	小野洋	8
ウスフタホシテントウの記録	小野洋	8
訂 正	赤枝一弘	8
誤 報 訂 正	道信順	8
— 採 集 記 —		
ムカシトンボ採集記	道信順	9
編集後記		10

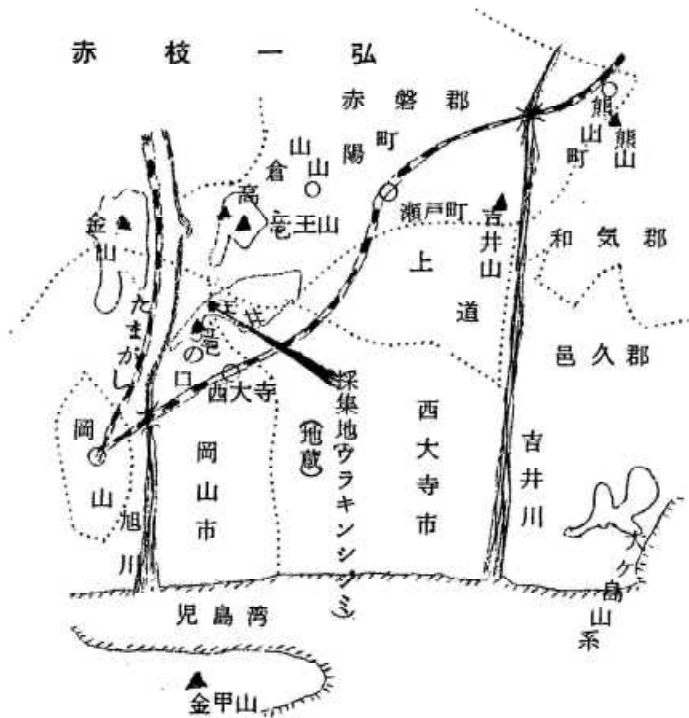
西大寺近隣の蝶 第五報

筆者が西大寺近隣の蝶1を発表してからすでに五年の年月がたつた。実に早いものでその時44種だつた種も60種を越え倉敷地方に近付きつつある。才四報を発表してすでに3年たつた、その間の新知見はずむし誌上に発表してきたが、小生もいよいよ大学生活最後の年であるから四報以来の知見をこの際まとめておきたい。

この西大寺近隣の範囲は一応西大寺市、上道町、邑久郡、それに旭川以東の岡山市をその範囲とする。最近筆者が特に力を

入れて調査したのは岡山市、西大寺市、にまたがる章の口山系である。海拔250~300mでこの範囲では一番高い山である。地図によつて筆者の調べりの周囲をながめてみよう。北部には章の口と旭川一つへだてて金山山系(500)がある。旭川の東側には老王山(300)高倉山(450)がありさらに東部には邑久郡と吉井川をへだてて吉井山(100)がありさらに熊山(500)がある。さらに南部には児島湾をへだてて児島半島の最高峰金甲山(400)がある。岡山県を北部、中部、南部、と三つの地帯に分けるとするなら、北部は中国山地、中部は吉備高原、南部は沖積平野となるであろう。金山山系、高倉山山系は南部と中部と境界地帯と考えられるが一応中部に属すると思う。そこで筆者の調査地は岡山県の南部を倉敷と共に代表し、北部ほど種類の多い県下の蝶がどこまで南下しているかを調べるのに参考になると思う。

金山山系には古くからウラキシジミ、ウラゴマダラキシジミの産することが知られておりその後、ダイミヨウセセリ、トラフキシジミ、スジボソヤマキチヨウ、アオバセセリ、等が知られ一応それ等の種の南限と考えられた。アオバセセリのごとく暖地帯の種でも県下では北部に産し、南部に産しないのが面白いところである。高倉山山系は本年筆者が調査したところではそれ等の種はいずれも採集出来なかつた。吉井山では秋山氏がウラキシジミを記録し県下の最南部、最低地の記録となつた。熊山はギフチヨウという伝説もあるがこれは現在ではまず見込なしで、この一帯にはクロキシジミが分布する。一方最南部の金甲山では、すでに1908年に鈴木氏によつてウラジロミドリキシジミが記録されており、1956に同好会の採集会でウスイロオナガキシジミが記録され、オナガ



アゲハ、カラスアゲハも比較的普通に産することが知られている。これ等の地帯にかこまれた西大寺地方は、最高峰が300mという極めてスケールの小さい地方であるが前記のように、岡山県南部の蝶を考へて行く時、なかなか重要でありかつ面白い。今年には竜の口山系の丁度岡山市、西大寺市、山陽町の接点にあたる地藏付近を調査し色々和新知見を得た。従来の記録も再整理して当地方の蝶を論じて行きたい。

○は4報以後の追加種。

Familia Hesperidae セセリチョウ科

1, *Brynnis mohtanus* ミヤマセセリ

竜の口山系では普通

○2, *Daimio tethys* ダイミヨウセセリ

本種は従来豪溪-金山の線が南限と考えられていた。事実竜の口山系でも1958年までは記録がなかつたが、8月18日に一頭採集次いで1959、5、3、さらに6、14、に岡山系の玉井で一頭記録し岡山系では確実に分布していることが分つた。従つて当地が岡山県における南限である。

3, *Thoressa varia* コチャバネセセリ、

丘陵地帯では普通

4, *Isotenon lamprospilus* ホソバセセリ、

丘陵地帯で普通、前種より分布は広い。

5, *Thymelicus sylvaticus* ヘリグロチャバネセセリ

竜の口山系では普通

6, *Potanthus flavum* キマダラセセリ

丘陵地帯では普通、平地では稀。

7, *Polytremis pellucida* オオチャバネセセリ

各地に普通

8, *Pelopidas mathias* チャバネセセリ

各地に普通

9, *Parnara guttata* イチモンジセセリ

各地に極めて普通

Familia Papilionidae アゲハチョウ科

10, *Byssa alcinous* ジャコウアゲハ

従来の産地では絶滅したが、竜の口山系の奥矢津附近に産す。

11, *Graphium sarpedon* アオスジアゲハ

各地に普通に産するが大森氏によると大ケ島一帯ではクスノキがないため見られないという。

12, *Dapilio machaon* キアゲハ

丘陵地帯では普通

13, *Papilio xuthus* アゲハ

各地に極めて普通

14, *Papilio protenor* クロアゲハ

各地に普通

- 15, *Papilio macilentus* オナガアゲハ
オ二報で報告したように大ヶ島山系で1頭採れているが極めて稀。
- 16, *Papilio helenus* モンキアゲハ
本種は個体数は少ないが比較的広く分布するらしい、すでに1901に筆者と同名の赤枝小太治氏が現在の上道町で記録している。その後、竜の口、赤枝、市街、久山、大ヶ島大森、と本誌上にすでに発表したように記録されている。
- 17, *Papilio bianor* カラスアゲハ
極めて稀で一報で報告した一頭の記録があるのみ。
Familia Pieridae シロチヨウ科
- 18, *Eurema hecabe* キチヨウ
各地に普通
- 19, *Eurema laeta* ツマグロキチヨウ
丘陵地では普通
- 20, *Colias erate* モンキチヨウ
各地に普通
- 21, *Anthocaris scolymus* ツマキチヨウ
当地では極めて稀で一報の記録があるのみ。その後採集できない。
- 22, *Pieris rapae* モンシロチヨウ
各地に極めて普通
- 23, *Pieris melete* スジグロシロチヨウ
丘陵地には普通、平地では稀
Familia Lycaenidae シジミチヨウ科
- 24, *Narathura japonica* ムラサキシジミ
各地に普通
- 25, *Artopoeetes payeri* ウラゴマダラシジミ
南部における本種の産地は最近続々と発表されて相当広く分布することが分つたが当地でも1959、6、14、竜の口山系の玉井で一頭採集した。
- 26, *Ussuriana stygiana* ウラキンシジミ
秋山氏の記録した吉井山と大体同緯度の竜の口山系の岡山市、山陽町、西大寺市、の境界点の地蔵、20mで1959、6、14、採集した。本種は南部では相当低山地にも比較的広く分布していると考えられる。
- 27, *Japonica lueta* アカシジミ
竜の口山系に産すが少
- 28, *Japonica saepestriata* ウラナミアカシジミ
竜の口山系に産すが少
- 29, *Antiglus attilia* ミズイロオナガシジミ
各地のブナ林に普通に産す
- 30, *Favonius orientalis* オオミドリ
各地のブナ林に分布するが少

- 31, *Ahlbergia ferrea* コツバメ
丘陵地に普通
- 32, *Lycaena phlaeas* ベニシジミ
各地に普通
- 33, *Lampides boeticus* ウラナミシジミ
筆者は当地においてはまだ8月以前に本種を見たことはない。従つてやはり移動してくることが考えられる。
- 34, *Zizeeria maha* ヤマトシジミ
各地に普通
- 35, *Zizina otis* シルグイアシジミ
その後各地で採集され、一応普遍的に分布するといつてもよい。
- 36, *Celastrina argiolus* ルリシジミ
各地に普通、特に早春に個体数が多い。
- 37, *Evers argiades* ツバメシジミ
各地に普通
- 38, *Tongeia fischeri* クロツバメシジミ
市街地では普通、他の場所では記録なし。
Familia Curetinae ウラギンシジミ科
- 39, *Curetia acuta* ウラギンシジミ
各地に普通
Familia Libytheidae テングチヨウ科
- 40, *Libythea celtis* テングチヨウ
竜の口山系では比較的普通。
Familia Danaidae マダラチヨウ科
- 41, *Caduga bita* アサギマダラ
本種は南部では9月以後でない記録がないが当地でも大ケ島山系で10月以後に記録されている。
Familia Nymphalidae タテハチヨウ科
- 42, *Argyronome laodice* ウラギンスジヒヨウモン
竜の口山系、玉井地方で1959、6、14、に3頭採集、ここでは比較的普通らしい。
- 43, *Argynnis paphia* ミドリヒヨウモン
竜の口山系に産するが少い。
- 44, *Argynnis anadyomene* クモガタヒヨウモン
竜の口山で採れるが稀。
- 45, *Damora sagana* メスグロヒヨウモン
各地で採集できるが比較的少い。
- 46, *Fabriciana adippe* ウラギンヒヨウモン
オ2種の記録があるのみ、極めて稀。

- 47, *Fabriciana nerippe* オオウラギンヒヨウモン
オ2報の記録があるのみ、極めて稀。
- 48, *Argyneus hyperbius* ツマドロヒヨウモン
各地に分布するが個体数は極めて少。
- 49, *Ladoga camilla* イチモンジチヨウ
各地に普通に分布する。
- 50, *Ladoga glorifica* アサマイチモンジ
各地に産すが前種より少。
- 51, *Neptis aceris* コミスジ
各地に普通。
- 52, *Daraneptis pryeri* ホシミスジ
各地に普通であるが市街地、平地に多い傾向がある。
- 53, *Polygonia caerulea* キタテハ
各地に普通
- 54, *Kaniska canace* ルリタテハ
各地に普通に分布するが、比較的少い。
- 55, *Nymphalis xanthomelas* ヒオドシチヨウ
オ4報の記録のみで極めて稀。
- 56, *Vanessa cardui* ヒメアカタテハ
各地に分布するが比較的少い、堤防等で時に多数の個体が見られる。
- 57, *Vanessa indica* アカタテハ
各地に普通。
- 58, *Apatura ilia* コムラサキ
各地に分布するが比較的少い。
- 59, *Hestina japonica* ゴマダラチヨウ
各地に分布するが比較的少い。エノキの大木に多く集つていることもある。
Familia Satyridae. ジャノメチヨウ科
- 60, *Ypthima argus* ヒメウラナミジャノメ
各地に極めて普通
- 61, *Ypthima matschuloky* ウラナミジャノメ
竜の口山系では比較的普通、他では未記録。
- 62, *Minois dryas* ジャノメチヨウ
各地に普通。
- 63, *Kirrodessa sicelis* ヒカゲチヨウ
各地に極めて普通
- 64, *Neope goschkevitschii* キマダラヒカゲ
各地に極めて普通

65, *Nycalesis gotama* ヒメジヤノメ

各地に普通

66, *Nycalesis franisca* コジヤノメ

丘陵地では普通

配列及び学名は日本産蝶類分布表白水によつた。今後の見とおしとしては、一応出るべき蝶は出そろつたの感があるが、一人の歩く範囲は知れたものであるから何が出るか分らない。他の南部地方から考えて見ると、

セセリチョウ科——アオバセセリ……は南部では未だ記録がないが金山山系に分布することから考えてあるいはと考えられる。

アゲハチョウ科——今のところ考えられないが近県に産するナガサキが採れぬともいへぬ。

シロチョウ科——スジボソヤマキチョウ……本種も南部では記録がないが、金山山系に分布するので可能性がないでもない。

シジミチョウ科——ウスイロオナガシジミ、ミドリシジミ、ウラジロミドリシジミ、トラフシジミ、ゴイシジミ、クロシジミ、セフィルス3種は倉敷及び児島半島に分布するのであるが、当地では筆者の歩いた範囲ではいずれも、カシワ、ナラガシワ、ハンノキ類がほとんどないので、これ等の群生地を見い出さねば望みが薄い。トラフは金山山系に分布することから、ゴイシは各地に極地的に分布することから期待できる。クロシジミは和気郡に産することから、続きの邑久郡の一部に産するかもしれない。

タテハチョウ科——しいていえば倉敷で記録されているスミナガシぐらい。

ジャノメチョウ科——クロヒカゲ、ヒメヒカゲ、クロノマチョウ、前2種は倉敷地方で記録があるが、ヒメヒカゲはちよつと期待できない。クロノマは現在県北では記録されるが南部では古い記録があるのみで長く記録がないが、もう採れてもよい時期である。

参考文献

- 西大寺近隣の蝶 赤枝 すずむし VOL. 4. NO. 3. 1954
- 倉敷附近の蝶類 小野、広瀬 すずむし VOL. 4. NO. 4. 5. 6. 1954
- 西大寺近隣の蝶2 赤枝、岡崎 すずむし VOL. 4. NO. 9. 1954
- 西大寺近隣産蝶3 赤枝 すずむし VOL. 5. NO. 6. 1955
- 邑久郡長船町附近の蝶類4題 秋山 すずむし VOL. 6. NO. 2.
- 西大寺近隣産蝶四報 赤枝、すずむし VOL. 6. NO. 4.
- 日本産蝶類分布表 白水 1958

昆虫 植物採集用具 理化学器械

岡山市西中山下 (柳川交差点東)

永瀬教育堂

電話 ② 4725

ニシキキンカメムシの生態断片

.....(成虫の活動が見られる植物について).....

小 野 洋

Poecilocoris splendidulus Esaki ニシキキンカメムシは、その分布が普遍的でなく、産地が極めて限られており、その上個体数も少ない珍稀種であるということもあつて、今のところ、その生態については、ほとんど究明されていない。食餌植物に関しても全く未知であつて、たゞ棲息環境に関連ある植物としてフジ等の植物上で採集される(石原、1947)ことか記録されており、殊に筑前の多産地である古庄山では、初夏の頃本種がイワフジの葉上に見出される(江崎、1950)ことが知られている程度である。

さて岡山県の地域では、1956年5月3日、阿哲峽において、倉敷昆虫同好会主催の採集会が行われた際に同行の風早保男氏によつて採集されたのが最初の記録であつて、当日計4♂××、が採集された(若林、1956)(KYO・1956)。(この中には老熟ニフが1♂×、含まれていた)現在県下では当地が唯一の産地で、その後ここからは毎年のように数個体ずつが記録されてはいるが、食餌植物については未だ不明である。1957年の調査結果ではフジ、サクラ、キク科小草本その他で発見され一定してはなかつたことが報告せられている(風早、1957)。

ところで、筆者は近藤光宏氏と、1959年5月3日の当地への調査で、若干興味深い生態を観察することができた。当日は例年より幾分多くの成虫が見受けられ、近藤氏7♂××、筆者11♂××、(2♀♀、9♂♂)を採集した。ところがこの18♂××、の中14♂××、までが次々と間をおいては、*Sinomenium acutum* (Thunb.) Rehd et Wils ツヅラフジ(オオツヅラフジ) [ツヅラフジ科]からのみ得られるといつたかなり顕著な傾向が見受けられたのである。他の4♂××、はケヤキ、ヤマブキ、カエデなどから得られた。採集の後半には、ツヅラフジを目標に探しさえすればかなり容易に発見し得たといつたような状態で、採集しなかつた個体もほとんどツヅラフジ上で活動しているのが認められた。前述のイワフジ [マメ科] と、本種とは分類的にはかなりはなれた位置にゐるので疑問に思つたのであるが付近にはイワフジは見当らなかつた。

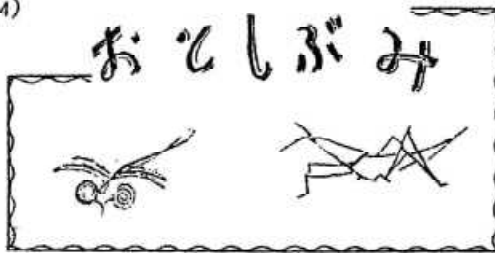
食餌植物ということになると別の問題であつて、成虫迄完全に成育させ得るものでなければならぬが、これらのものと全く関連がないとは、一概にはいひきれないようである。本種も一化性で越冬態はアサジキンカメムシなどと同様にやはり幼虫態であると考へられているので、食餌植物を確認するにはもつと早い時期に当地で若令ニフからの観察を行なうことが必要である。当地でも成虫になつてからの活動が見られる植物は前述したように多種類にわたつているが、とにかく当日はツヅラフジに活動する個体(成虫)が断然多く認められたことを報告しておく。

ちなみに当地での成虫の発生消長は、今迄のところ、4月下旬老熟幼虫、成虫、5月上旬最盛期、中旬やゝ減少、6月上旬にはほとんど見受けられなくなるといつた程度のことがかつてゐる。

文末ながら、本種の同定を賜つたうえいろいろと御教示をいただいた長谷川仁先生に対し深謝の意を表す。

引 用 文 献

- 1) 江崎悌三(1950): 日本昆虫図鑑(カメムシ科)、東京、北隆館、1738pp、00 p.188、
- 2) 石原 保(1947): 日本産カメムシ科概説、虫、自然、2(4.5.6): 55-69、
- 3) 風早保男(1957): 阿哲峽のニシキキンカメムシについてすずむし、7(2): 11
- 4) KYO(1956): 昆虫お国じまん(山陽の巻)、新昆虫、9(10): 20-23、
- 5) 若林正史(1956): 阿哲峽採集記、すずむし、6(1): 6、



蝶の記録二、三について

1) ヒロオビミドリシジミ

1959年6月28日、高梁市玉川町玉勘場より本種1♀を採集した。

2) ミヤマカラスアゲハ

1959年5月3日、高梁市奥万田より本種1♀を採集した。

3) オオヒカゲ

1959年9月20日、阿哲郡荒戸山方面へ採集に行つた。芸備線矢神駅から荒戸山に至る山道で灌木の間よりゆるやかに飛び出た本種1頭を採集した。この日は天気は良好で採集した時刻は11時頃だつた。

なおヒロオビミドリシジミとミヤマカラスアゲハは去る10月19日に岡山大学で昆虫学会が開かれたが、その時九州大学の白水隆先生に同定を御願ひした。白水先生に感謝します。

(高梁市玉川町玉 堀 浩)

蠶生門の

クロホシテントウゴミムシダマシ

1959年8月13日、新見市の羅生門付近で採集を行つた際、クロホシテントウゴミムシダマシ *Derispia maculipennis* Marsoul. lox. を記録した。本種の分布は本州、四国。さして稀なものではないが、一応県下の新産地として報告しておく。

(小野 洋)

ウスフタホシテントウの記録

1959年4月19日、岡山県和気郡吉永町八塔寺付近で *Hyperaepia japonica* Grotch ウスフタホシテントウ2♂♂を採集した。分布は本州、九州。県下における新しい産地として報告する。比較的多くない。

(小野 洋)

訂 正

先に *Gomphus oculatus* メガネサナエとして発表しました種は、その後、安東氏を通し、朝比奈先生に見ていただいた結果、*Gomphus nagoyanus* Asahina ナゴヤサナエであることが分りましたので訂正するとともに、両氏に感謝いたします。なお、本種は岡山県における最初の記録である。

(赤枝一弘)

誤 報 訂 正

すずむし、Vol. 7, No. 1, 1957の(美作の蝶について)のうち、1、ヒロオビミドリシジミはハヤシミドリシジミに訂正いたします。誤報のいきさつは、1955年真庭郡勝山町で採集したシジミ3♀の種名不明のため、九州大学に行く人にことずけ、故江崎先生の同定を依頼したところ、その人に、「ヒロオビだろ」との伝言があり、その後1956~1958年にわたり苫田郡上齊原村に於て、多数の本種が発見されたため再び、残りの勝山町産のものと共に九州大学白水隆先生に標本を直接送つて同定願つたところ、命名者である先生からハヤシとの回答を得ました。直接、私が同定を得たわけではなく、その同定のいきさつもよくわからぬまま、軽々しく発表し、故先生に対してその名を傷つける様な結果になつた私の不明さをお詫

び致します。同時に白水先生にお礼申します。尚美作地方に於てはその後ヒロオビはまだ記録されていません。
(通信順)

~~~~~ムカシトンボ採集記~~~~~  
~~~~~道 信 順~~~~~

59年5月10日 苫田郡鏡野町 3♂1♀

5月3日同行の片山、竹内氏と共に同地に採集をこころみました。此処は泉ヶ山の一渓谷で今までにフジミドリシジミ、キマダラルリツバメ、ムカシヤンマ、等を採集した好採集地であるが、かなり登らないとよい場所はなく、途中平凡な道をミヤマカラスアゲハを追つたり、ウスバシロチョウを見かけながら登る。ムカシトンボの時季だから、あわよくば網にしようとしそかに念願しながら谷川に気をくばりながら行く、部落の最後の家も過ぎ、田畑もつきる頃谷はようやく溪流らしくなり水があわ立つて流れる。ダビドサナエ、カワトンボが多い。

荷車の入る一番奥の道巾のひろい場所で昼食をとる。ここから奥が木が多く本当の意味の山に入るのであるが、途中時間をかけすぎで帰り仕度にかかる。谷の岸に生えているシダの辺にトンボらしいものが飛んでいる。兩岸の樹木のため暗らくてよく見えないが、時々シダの葉に止まる如く近づきながら又離れてとび去る、ムカシかな、と網を持つと川上へ飛去ってしまった。

結局、その日はよい収かくもなく帰路についた。帰宅してから、どうも最後に見たトンボが気にかかり、再び次の日曜日である5月10日、今度は一人で同地におもむいた。先日の場所まで一気に到着し、腰を落着けてトンボを持つ、やはり案にたがわず先日同様、川下から前の谷の岸に飛んで来たトンボがある。目の前でしばらく小昆虫を捕食しては川上へ姿を消し、再びはるか高い所を杉の枝などに一寸さわるようにしては川下に下り、上つて来ては再び同じ行動をくりかえす。網を振つても足場が悪いため二時間はどねばつて三度ばかり網を振つたがどうしても網にすることが出来ない。その間ダビドサナエに迷わされたりしながらとうとうあきらめ、泉上の頂上をきわめる積りでそこから登りはじめる。谷は暗い杉林に入る。こんな場所はえものは少ないものである。道を急ぐ途中所々日光がもれて明るい所がある。その明るい場所でちらちらするものがあるので網にしてみても驚喜した、待望のムカシトンボである。その喜びははじめてフジミドリをブナの木に登つて一時間近くも待つて採つた時の気持と似ていた。もういい、と一人でつぶやく。

新刊書籍・雑誌・文具

愛文社書店

倉敷市阿知町 TEL 126

テ 理 生 物 ・ 地 学 標 本 模 型
ー 化 昆 虫 採 集 用 具
コ 学
ー 器 テレビ・ラジオ・真空管
ダ 機 島津製作所岡山県代理店

サ 打 工 商 会

倉敷市栄町(赤木病院西) 電話 913 番

そのあたりは暗いため注意がとどかなかつたが、よく見渡すと谷の少し広い所には二、三匹づつ飛んでいる。杉林の上手は両岸が雑木林であるが、その辺にも杉林中とちがわないう程度に多い。その日20匹以上目にすることが出来た。広いところでは飛び方は早い、せまい場所では、丁度カトリヤンマが上下左右に蚊を捕食する様子とよく以ていて、捕食に夢中で飛び方もそれ程早くない。どういわけか当日見たところでは常に飛んでいて、静止した姿は一度も目にすることはなかつた。谷巾は水の巾1m~2mで大石小石の多い、いわゆる溪流である。こんな場所は中国山脈中の高い山なら殆んどこんな様子であるから、時季さえよかつたなら、まだまだ産地は多く発見出来ると思う。念のため蜻蛉同好会の朝比奈先生に同定をいただき、ムカシトンボであることを確認しました。

会費納入のお願い

年があらたまつて、又会費納入の時期がやつて来ました。いろいろ御都合があまりのことと思ひますが、1960年分会費をできるだけ早急に納入下さいますようお願いいたします。昨年も未納の方がかなりありまして、四苦八苦いたしました。本年こそは会の運営をもつとスムーズに、したいと思つております。

会員大募集

最近では会員の平均年齢が少しづつ高くなつてきます。本会では十代の方の入会も大歓迎しております。知りあひの方で好きな人がありましたら、入会をおすすめ下さい。

編 集 後 記

暖冬ならぬ大変寒さの厳しい昨今でございますが、読者のみなさんには、各々の道に精進されていることと思ひます。県北一帯の積雪も何十年来の記録とのこと、紙上にとどめず会員の皆様と一度行つてみたいものです。

しかし、そこで冬を越している諸々の虫族の戦いはまたひとしおでございます。筆者等コタツ族には、およそ考えるにもおよびません。そろそろ寒さには飽いてまいりました。早く暖かい春を迎えて、野山にその肩の重荷をほぐしたいものです。

さて、ここにすずむし9巻4号をお届けします。本号には、毎回熱心に寄稿されていた赤枝氏が、「西大寺近隣の蝶才五報」を、また編集委員の小野氏は、久しぶりに「ニシキキンカメムシの生態」に始まるおとしぶみ二編を投稿されました。

申すまでもありませんが、発行がこんなに遅れ、みなさんに幾多の御迷惑のおよんでいますことを、編集部一同深くお詫びいたします。

発足以来9年、やがて10周期を迎えようとしていますが、ここで、ふり出しにもどつたつもりで、もう一度、足元から掘りかえしてみたいものです。「すずむし」もその内容の発展を願うとともに、もつと興味あるものに育てたい気持ち一杯です。台所から、クラブの窓、そして庭の樹木に集まる虫類に今一度目を向けてみてはいかがでしょうか。(K)

理化学器機・光学器機・度量衡・計量器・採集用具

平田光学器機店

岡山市中之町27 電話 ②5475

すずむし 第9巻第4号 昭和35年 2月10日 印刷
昭和35年 2月15日 発行

編集兼 岡山大学大原農業生物研究所

発行者 害虫部第2研究室内

倉敷昆虫同好会

印刷所 岡山市放送局通り電停角

アート印刷社 TEL(3) / 82 / 番